石黒忠悳の家塾跡と名倉家

我部正彦

石黒忠悳（一八四五～一九四一）について興味をもったのは、名倉知文の『整骨説略』（明治七年刊）の緒言に「同僚石黒氏…」とあったのを調べてからである。

岩波文庫『懐旧九十年』の解題に孫の原もと子氏は、「…一三〇余年前に日本の片田舎から出て来た天涯孤独の一少年が、医者を志して文字通りの苦学力行…」して、ついに明治二十三年に第五代陸軍軍医総監になった。その経緯は、老翁の自伝に詳しく述べられてあるが、その一因は家塾と名倉家の関わりにあった。

名倉知文（一八四一～一八九八）は、千住の名倉の業祖・名倉直賢の三男知重、さらにその三男である。眞齋と号し、長崎でポンペについて修業した。徳川氏に仕え、戊辰戦争では幕府軍として会津に転戦したが、幕府瓦解とともに第一五代将軍徳川慶喜公に従って静岡に移った。後に軍籍に入り、明治十年の西南の役を経て一等軍医正、同十九年軍医監に進み従五位に叙せられた。（物故人名辞典より）

文芸春秋の昭和二年八月号に「石黒忠悳と菊地寛の座談会」の記事がある。石黒が二十歳のとき、医者になった理由として名倉の話が出てくる。後に『懐旧九十年』にも述べられているが、石黒は十七歳のとき現在の新潟県小千谷市片貝町池津で漢学の私塾を開いて食客を置いていた。先祖は上杉謙信の家臣であった。江戸の末期の経済変動で生活が困窮し、近郷にある骨継が流行るのを見て、江戸へ出て整骨医を志してみようと考える。

萩原英助という儒者を頼って薬研堀の名倉へ紹介してもらおうとするが、「真に整骨をやろうと思うなら麹町の名倉弥五郎の所へ行きなさい」と添書をもたせてくれた。弥五郎は石黒に「整骨などというものは実に範囲の狭いもので、貴方の履歴とまた人となりをも伺って、もしおやんなさるならば、当たり前の医者をお修めなさい」とさとされて、ついに西洋医学を学ぶ道に入ったという。その時、「義弟の知文が二十四歳、息子の納が八歳である」といっていたとある。こうした縁が後に名倉知文との友情につな

がるのである。

新潟市で開かれた第八九回日本医史学会の折、旧越後三島郡片貝村池津の石黒忠悳の家塾跡を訪ねてみた。つい三年前まで文久元年（一八六一）に石黒が十七歳の時に建てた家がそのまま遺っていたそうである。昭和六十年に取り壊されて家屋は建て替えられてあった。

現当主の石黒六郎氏にお会いし、話をうかがった。家塾跡の屋敷の裏庭に、「茂美の碑」というのがある。側にはモミの大木が繁っていた。それに「このもみの木は、文久元年（一八六一）二月二十四日久賀子が刀自八島の安達家から石黒家へ嫁入の時、袂に入れて持参したものである」と刻まれてあった。

「石黒忠悳 昭和十六年四月二十六日没 行年九十七歳。久賀子大正十二年三月十五日没行年八十歳」とあった。家塾の入口の道路際の畑の中には、「石黒翁思い出の地」と刻まれた大きな石碑も建っていた。

現在、遺品もたくさん残っていて、とくに手紙、葉書等の書簡類は数十通に達し貴重な資料である。家塾で使用した机もあり、また明治二十年代に洋行時ロンドンで購入した記念の洋服、村医時代の医療器具も大事に保存されていて、石黒翁の活動の跡を偲び深い感動をおぼえた。

この家屋は『懐旧九十年』によると「この池津には、石黒家歴代の屋敷地があり…因縁深い土地なのです。幸い近くの長岡町に神官の売家がありましたから、それを購い求め、池津に移して建て直しました…」とある。

幸運にも建て替え時に撮った家塾跡の写真が残っていたので、スライドにし今回報告する次第です。

（社団法人・日本柔道整復師会）